



漂う木の香り

自社工場、スノーボードに使つたヒノキの寸法を従業員と確認する柴原さん(右)。機械音が響き、木の香りが漂う。南木曾町

製材工場数と出荷量 県林務部によると、県内の2007年の製材工場数は235カ所、1970(昭和45)年の約4分の1で、製材品出荷量も1割強の15万8000立方メートルに落ち込み、1工場当たりの平均出荷量はほぼ半減した。07年の住宅

着工戸数は70年より72.6減の1万5567戸。このうち木造は同75.8減の1万449戸で、割合は67.1%と11.7%減少。製材した県産ヒノキ1立方メートルの平均価格は、80年が14万8030円、07年は7万2100円だった。

木曾ヒノキのうねりが来スベースシャトルで宇宙へ。県がそう公表した一月下旬。旧中山道妻籠宿に近い木曾郡南木曾町の製材会社で、社長の柴原さん

緑輝け 6

第2部 木を生かす ①

落ち込む製材出荷 建築需要に懸ける未来

十二月に行った公表。同市内の国有林から切り出したヒノキが入札にかり、長さ三メートルの丸太が一立方メートル約二千円で落札された。直徑十一センチと細く、傷みもあったとはいえず、万円単位が普通というヒノキの取引では考えられなかった数字だ。

直徑が平均十八センチとすると、丸太でおよそ十三本分。五十年近く育てて、一本百五十円余の計算だ。「大根より安いヒノキとなりました」。柴原さんは知人らにメールを送った。

柴原さんの会社は、父秀満さん(五)が一六六(昭和三十七)年に創業。主に国有林のヒノキやサワラなどを製材してきた。木曾ヒノキのブランド力も手伝い、電話一本で注文が取れる時期もあった。しかし、外国産材の流入や木造建築の減少で需要は先細りに。販売量は徐々に落ちていった。

十年ほど前から建材以外の新製品も手掛ける。かまぼこ板、皿、スノーボード。模索の一方で、柴原さんは「やはり建築に木をどんどん使ってもらいたい」と思っている。それが将来の光になる。と思う。

漂う木の香り。床板の上を子どもたちがはだして走り回る。千葉県市川市に昨年開園した私立「風の谷保育園」。以前の顧客のついで、柴原さんの会社が木曾のヒノキやヒバなどを納め、金具を使わない伝統的な木造工法で建てられた。

目を引くのが天井のアーチだ。建物を支える構造材に使われている間伐材は直徑十六センチ。この太さの木は、普段なら切り捨てられている。計画を聞いた時、柴原さんは「えー」と声を上げて驚いた。大規模建築に必要な強度が確保できないと思っていたからだ。

「こんな木でも役立つようになったら山はもっと元気な」。園舎の新築に納めた木材は、十五センチラック十五台分、四センチラック十台分になった。柴原さんは今、細い間伐材を使った建築のモデルづくりに取り組む。

木を育てる。木を使う。二つがかみ合って、資源も経済も循環する。第二部は、製材や建築、流通の現場をみる。

文・島田隆一
写真・太田一彰
(毎週火曜日に掲載します)

南木曾町の隣、岐阜県中津川市にある東濃森林管理署が昨年